2-1.浜松城下の営みにみる歴史的風致

(1)はじめに

若き日の徳川家康が過ごした浜松市には、家康ゆかりの城跡や社寺が数多く存在し、家康の浜松城在城時からの信仰と行事が今なお続いているものがある。

江戸時代初期に浜松城が徳川譜代の城として歩み始めると、それと同時に城下町の整備が進み、浜松城下は、城下町として、また、宿場町(浜松宿)として大いに賑わった。要所要所に配置された神社仏閣だけでなく、東海道沿いに開発された町人地では町屋が軒を連ね、旅籠などの宿場としての機能のほか、職人や商人が多く住む町として発展し、武家文化だけでなく町人文化も花開いた。現在では、町屋自体はそのほとんどが建て替えられるなどして姿を消したが、街区の構成や町名などにその名残を色濃く留め、また、浜松城下の商業を主とした中心市街地としての特徴は現代に引き継がれている。

浜松市の中心市街地では、神社仏閣の残る旧浜松城下町や、周辺の家康ゆかりの地を舞台に、お鴨江まいり(鴨江寺彼岸会)や遠州大念仏などの祭礼や、浜松まつりといった行事が行われている。

(2)浜松城と浜松城下町の形成

浜松城は、浜松市中央区に位置し、三方原台地の東縁にあたる段丘を利用した平山城である。ＪＲ浜松駅からもほど近く、浜松城とその城下町は、現在みられる浜松の市街地の基礎となっている。

浜松城は、徳川家康の築城として著名であるが、その前後の時代にも、改変、拡張が繰り返されている。

浜松城の前身は、15 世紀ごろに築かれた「引間[1]城」であり、このころの城域[2]は、浜松城公園の北東部にある元城町東照宮にその名残を留めている。

元亀元年(1570)、徳川家康が岡崎から浜松に移ると、引間城は「浜松城」と改称され、武田信玄に対する前線基地として拡張、整備された。このとき、武家の屋敷地や商人の居住地も拡充されたとみられ、現在も残る浜松城の原型が形作られたと考えられる。

天正 18 年(1590)、豊臣秀吉が天下統一を成し遂げ、徳川家康が関東に移封されると、浜松城には、豊臣氏家臣の堀尾吉晴が入城し、浜松城は高い石垣と天守をもつ豪壮な城郭として生まれ変わった。

慶長５年(1600)、関ヶ原の戦いで徳川家康率いる東軍が西軍に勝利すると、浜松城は徳川

[1] 引馬や曳馬、疋馬などと記載する資料もある。
[2] 土塁や堀、城柵などで囲まれた城の範囲を示す。一般的には大手門よりも内側をいう。

譜代の大名が治める拠点として大規模な改修が行われ、三の丸をはじめとして城域が拡大し、近世城郭としてその姿が整えられた。また、新設された大手門を基準として東海道が移設され、その周辺に城下町が築かれた。これにより、宿場としても、それまでは引間城の東側に位置した引間宿がこの地域の宿場として栄えていたが、拡張・整備された浜松城から主に南側に拡がる城下町と東海道沿いを中心とした浜松宿（はままつしゅく）がこれにとって代わることとなる。なお、近世浜松城の城下町に関わる地割は、現在まで踏襲されているものが多い。

浜松の城下町は、おおよそ、東西 1.8 キロメートル、南北 1.5 キロメートルの規模を持ち、大手門で東から南にほぼ直角に折れ曲がる東海道、北遠、信州へつながる秋葉街道（あきはかいどう）、浜名湖北岸へつづく姫街道（ひめかいどう）（本坂通（ほんざかどおり））といった主要な街道が城下町を貫いている。

浜松は戦災で浜松城の城下町としての景観がほとんど失われ、さらに、開発が進んだことも相まって、かつてのまち並みの面影をうかがうことは難しいが、現在でも街道沿いに残る短冊状の区画や寺社地にその名残をみることができる。

図2-1-1　浜松領分絵図（浜松城下周辺部拡大）（絵図に一部加筆）
延宝８年（1680）製作の絵図。領内の道筋や川筋、社寺、樹木などが詳しく描かれ、浜松城が台地の縁辺に位置していることや浜松城や城下町と街道との位置関係が読み取れる。

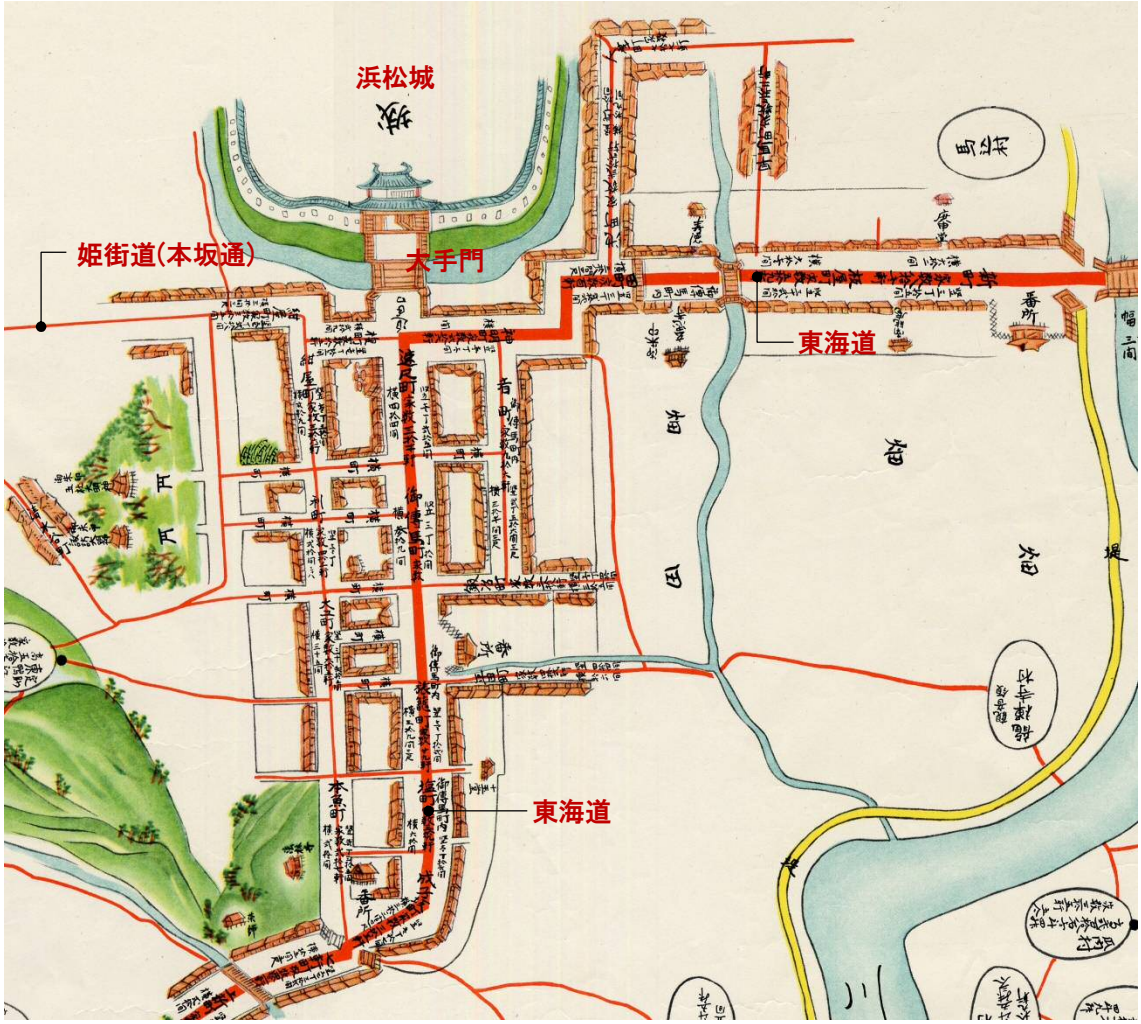

図2-1-2　浜松御城下略絵図(宝永絵図)(浜松城下周辺部拡大)　(絵図に一部加筆)

宝永年間(1704-1711)の製作と推測されている絵図。浜松城下と周辺の村々が描かれており、東海道の道筋や町屋の家並みなども描かれていて、浜松城や東海道沿いを中心に浜松城下に宿が形成されていることがわかる。

(3)浜松城下町及びその周辺を構成する建造物

①浜松城跡(浜松城公園)

徳川家康が元亀元年(1570)に引間城(現在の元城町東照宮周辺)に入城して以来、城の拡張や城域の拡大が徐々に進み、江戸時代初期には、浜松城は、近世城郭としてその姿が整えられた。

図2-1-3 浜松城(復興天守閣と復元された天守門)

その後、浜松城は、明治維新後廃城となるまで存続するが、江戸時代の絵図には天守が描かれたものが見当たらない。廃城後、二の丸御殿などの城域に残る建物も払い下げとなり、浜松城を構成した建物で現存するものはない。

現在の浜松城跡は、天守曲輪を中心にその一部が浜松城公園の一部として整備され、天守台や石垣が残り、復興天守閣や復元された天守門が建つ。浜松城における天守の存在を示す資料は皆無に等しく、現在復元されている天守閣は想像に過ぎないが、天守曲輪から大量に瓦が出土しており、天守とそれに伴う建物の存在は明らかである。

浜松城跡を含む浜松城公園は、春には各所に桜が咲き誇り、大勢の花見客で賑わいを見せる。新緑の季節や、真冬の「遠州のからっ風」の季節においても、観光客に交じり、浜松城周辺を散歩したり憩う人々の姿が見られ、浜松城は浜松のシンボルとして、また、市民の憩いの場として、広く市民に親しまれている。また、浜松まつりでは、浜松城の復興天守閣を背景に御殿屋台が巡行する姿が見られる。

図2-1-4 浜松城公園

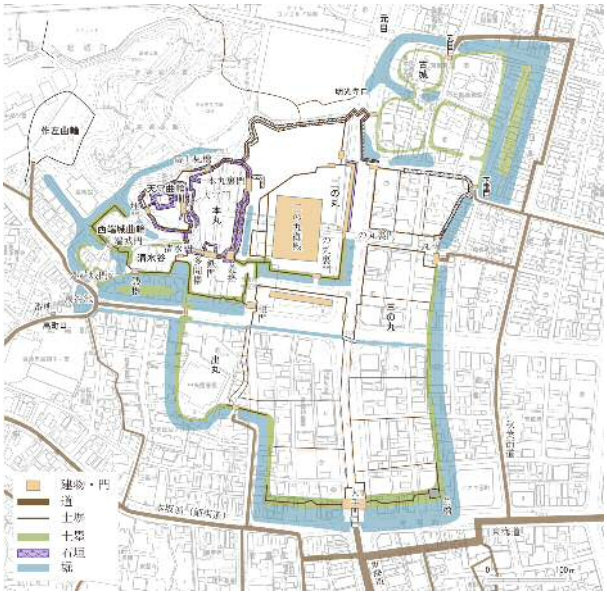

図2-1-5 江戸時代の浜松城の再現図(現在の地図に浜松城の範囲を加筆)

ア.浜松城の石垣

天守台や曲輪（くるわ）として現在も残る石垣は、浜松城跡17次発掘調査（平成27年（2015））及び同24次発掘調査（平成30年（2018））により、天正18年（1590）に豊臣家の重臣である堀尾吉晴（ほりおよしはる）が浜松城主となった時期のものと考えられており、石材をあまり加工せずに積み上げた「野面積（のづらづみ）」と呼ばれる方法で築かれている。石垣の石材については浜名湖北岸に多く見られる珪岩とよばれる岩石などを使用しており、これらは、浜松城へ、浜名湖の水運を利用して、佐鳴湖東岸で陸揚げされたと推定されている[1]。

図2-1-6 天守曲輪の石垣（野面積）

浜松城の天守台は、一辺約21メートルのややいびつな四角形を呈しており、西側に八幡台と呼ばれる突出部が付く。また、東側には付櫓（つけやぐら）と呼ばれる張り出し部分があり、現在は復興天守閣への入り口として利用されている。

図2-1-7 現存する石垣の平面図

[1] 浜名湖北岸のほか、天竜（船明（ふなぎら）周辺）からも石材が持ち込まれたとみられており、これらは、当時の天竜川（小天竜（現在の馬込川））を利用して運ばれたと推定されている。

イ.浜松城の復興天守閣

現在、天守台の上に建てられている復興天守閣は、設計図や当時の広報はままつ、新聞記事によると、昭和33年(1958)に鉄筋コンクリート造、瓦葺、地上３階地下１階建てで建築されたもので、名古屋工業大学の城戸久教授によって設計された。徳川家康の築城を想定し、そのころの建築様式から、大きな屋根を持つ下層部分に入母屋造の屋根をもつ望楼を築く「望楼型」に設計され、外観は下見板張が採用された。

図2-1-8 浜松城(復興天守閣)

現在は、調査研究が進み、天守台の石垣については、徳川家康築城とされる天正９年(1581)ごろよりあとの、天正 18 年(1590)ごろの堀尾吉晴が城主であった時代のものと考えられている。浜松城の天守に関わる古文書や絵図は発見されていないが、天守台とその周辺で鯱瓦が採集されていることや、地階に井戸があることから安土桃山時代に天守が存在した可能性が高く、松江城天守を参考事例として挙げることができる。また、復興天守閣の大きさは天守台と比べると小型であることから、現存する天守台の大きさを基準にすると、安土桃山時代の天守は、現在の復興天守閣より大型であったと考えられている。

この復興天守閣は市民の寄付により建てられており、多くの市民の浜松城への想いが汲みとれる。明治維新以降、廃城となり、石垣だけが残る状態だった浜松城だったが、昭和25年(1950)、浜松城公園が整備されると、次第に地域の人々から地域のシンボルとなる復興天守閣建設の機運が高まった。復興天守閣の建設は、市民からの寄付金を募って資金調達する方針とされ、昭和 31 年(1956)に浜松城再建期成同盟会が結成された。総工費約 1,400 万円[1]のうち、市民からの寄付金は約900万円である。

昭和33年(1958)、復興天守閣が完成し、３階が展望室、１、２階及び地階は浜松市立郷土博物館として開館したが、昭和54年(1979)、蜆塚四丁目に浜松市博物館が開館し、郷土博物館は閉館となった。現在は、浜松城とその周辺の歴史と見どころを紹介する施設として使用され、多くの来館者が訪れ、地域のシンボルとして親しまれている。

ウ. 元城町東照宮(引間城跡)

元城町東照宮は、拡張・整備された浜松城のもととなった引間城の跡に、明治中期(社伝によれば明治19年(1886))、旧幕臣井上延陵により創建された神社で、徳川家康を祭神として祀り、現在は元城町の氏神として地域の信仰を集めている。

社殿は空襲で被災し、現在の再建された社殿は、社殿裏に設置された東照宮新築工事の銘板から、昭和34年(1959)に竣工したものである。いわゆる権現造の建物で、鉄筋コンクリート造平屋建て、銅板葺で、入母屋造の拝殿正面には千鳥破風と軒唐破風付１間向拝が付く。

[1] 現在の貨幣価値に換算すると約２億8,000万円相当と考えられる。

また、境内には、当時、管理が委ねられていた「大日本報徳社」の銘と「大正六年(1917)四月建之」の銘の刻まれた鳥居や、「明治十九年(1886)」の銘の刻まれた手水鉢、「明治三十四年(1901)四月」の銘が刻まれた、浜松堀留合資会社と浜松委托株式会社が建立した井上延陵君碑が建つ。

図2-1-9 元城町東照宮

図2-1-10 元城町東照宮社殿

②近代化遺産

ア.旧浜松銀行協会(木下惠介記念館)

旧浜松銀行協会の建物は、『濱松銀行集会所新築工事 工事日誌』によると、昭和５年(1930)に竣工した建物で、「浜松銀行集会所」、「手形交換所」として建設された。浜松市出身の建築家・中村與資平[1]の設計によるもので、鉄筋コンクリート造２階建て。飾り付きの白い窓、濃緑のスペイン瓦、半円のアーチ窓、玄関の彩色タイル、ステンドグラスなどが意匠に取り入れられ、当時もてはやされた南欧風の洋風建築の要素が取り入れられている。戦後は一時進駐軍の事務所となった時期もあったが、浜松銀行協会の施設として使用され、平成 16 年(2004)に協会の役目を終えて浜松市に寄贈されるまで、金融業の世界で、浜松の近代産業の発展を支えた。

図2-1-11 旧浜松銀行協会

現在は、外観・内装を変えずに当時の姿をよく残したまま、浜松市出身の映画監督木下惠介の記念館として公開され、協会当時の調度品がそのまま使用されている。当市で創立したヤマハ(日本楽器)が楽器製造の木材加工の技術を生かしたテーブルや椅子などの家具は、戦前のサロンの雰囲気を伝えるものとして貴重である。

また、浜松まつりでは、鴨江方面の参加町の御殿屋台が建物の前を通り、浜松まつりの長い歴史のなかの昭和初期の風景を垣間見ることができる。

[1] 東京駅設計で名高い辰野金吾に師事し、1912 年、京城(現在の韓国の首都ソウル)に中村建設事務所を開設。1922 年、東京に中村工務所を開設。静岡県内でも銀行建築、公共建築を多く手掛けた国内外で活躍した建築家。市内で手掛けた建築では、旧浜松市公会堂・旧遠州鉄道本社ビル・旧誠心女子学園校舎が取り壊されてしまったが、旧浜松銀行協会と旧遠州銀行本店が残る。

イ.静岡銀行浜松営業部本館(旧遠州銀行本店)

図2-1-12 静岡銀行浜松営業部本館

現在の静岡銀行浜松営業部本館は、『静岡銀行史』(昭和 35 年(1960)発行)によると、昭和３年(1928)に遠州銀行本店として建設された。静岡県初の鉄骨鉄筋コンクリート造の建物で、地上３階、地下１階、内部には２層にわたる大きな吹き抜けがある。中村與資平の設計によるもので、外観は柱の頭部に左右対称の渦巻き状の装飾を施した「イオニア式」と呼ばれる建築様式の、ギリシャ神殿風のデザインが特徴である。のちの静岡銀行との合併を経て、現在は静岡銀行浜松営業部本館として使用されている。

建設当初より、銀行としての営業を継続しており、金融業の世界で浜松の近代産業の発展を支え、現代においても浜松のものづくり産業を陰で支え続けているとともに、ホールを利用したコンサートを開催するなど市民への公開も行われている。

また、浜松まつりにおいては、御殿屋台引き回しで各町が市街地に集まって行われる合同引き回しの際のルート上にも位置し、現在のような豪華絢爛な御殿屋台となった昭和初期当初から、変わらぬ光景を見せてくれている。

ウ.旧浜松警察署(鴨江アートセンター)

図2-1-13 旧浜松警察署の建造当初の姿
(昭和 13 年(1938)撮影)

旧浜松銀行協会の向いにある旧浜松警察署は、昭和３年(1928)に竣工した建物で、建造当初の姿のわかる昭和 13 年(1938)に撮影された写真が残る。鉄筋コンクリート造、地上３階建ての建物で、重厚な古典的様式の構成のなかに、幾何学的構成の近代的な様式が加味されている。シンメトリーを基本としているが、軒高 30 メートルの外部回廊付望楼を東寄りに、１階監房棟の付属屋を西側に配していた。

図2-1-14 旧浜松警察署(鴨江アートセンター)の現在の姿

昭和 46 年(1971)に警察署の機能が移転したあとは、昭和 49 年(1974)には外壁のタイルの大半をモルタル仕上げにするなどの大規模な改修工事が行われ、浜松市社会福祉会館として生まれ変わり、昭和 59 年(1984)にはさらに改修工事が行われて浜松市鴨江別館と改称されて利用されたが、老朽化のため平成 13 年(2001)に望楼部分は取り壊された。その後、解体処分の方針が決定されたが、市民による保存運動を契機に保存・再活用に方針転

換され、耐震改修工事が施され、現在は鴨江アートセンターとして再生している[1]。

浜松まつりでは、鴨江方面の参加町の御殿屋台が建物の前を通り、浜松まつりの長い歴史のなかの昭和初期の風景を垣間見ることができる。

③浜松城下町

浜松は戦災で浜松城の城下町としての景観がほとんど失われ、さらに、開発が進んだことも相まって、かつての面影をうかがうことは難しいが、街道沿いに残る短冊状の区画や寺社地にその名残をみることができる。なかでも寺社地は、戦災後に社殿が再建され、現在まで信仰が続いているものが多い。

ア.五社神社（ごしゃ） 諏訪神社（すわ）

五社神社及び諏訪神社は、元は別々の神社であったが、昭和 35 年(1960)に合祀され、現在は一つの社殿に祀られている。

五社神社は、徳川家康（とくがわいえやす）によって、２代将軍秀忠（ひでただ）誕生の際に産土神として浜松城内から現在の地に遷された。花崗岩の切石を寸分の狂いもなく整然と積みあげた石垣や「寛永十五戊寅年(1638)五月吉日 高力摂津守従五位下 平忠房」の刻銘が残る、第５代浜松城主・高力忠房（こうりきただふさ）が寄進した手水鉢などが残る。諏訪（すわ）神社も、２代将軍秀忠（ひでただ）の産土神とされ、もとは中島村六本松（なかじまむらろっぽんまつ）(現在の中央区中島一丁目)に鎮座していたが、数回の遷座を経て、３代将軍家光によって現在の地の南に遷され、その後、両神社は長らく隣接していた。

両神社社殿の壮麗さは、『土のいろ[2]　第一巻第五号』(大正 13 年(1924))によれば、江戸時代から浜松周辺の俚謡（りよう）[3]で「お江戸見たけりゃ浜松ごろじょ[4] お江戸ささりの五社や諏訪[5]」と謡（うた）われたとされ、戦前には国宝建造物に指定されたが、空襲で焼失した。

両神社は昭和 35 年(1960)に合祀され、「五社（ごしゃ）神

図2-1-15　五社神社諏訪神社(鳥居から望む)

図2-1-16　五社神社諏訪神社社殿と手水所

図2-1-17　高力忠房が寄進した手水鉢

---

1 旧浜松警察署に関する記述は、『BEKKAN　浜松市鴨江別館　●旧.浜松警察署　遺された昭和の記憶』(公益社団法人静岡県建築士会　西部ブロック　まちづくり委員会)を参考にして記載した。

2 飯尾哲爾によって編集・発行された郷土の民俗・歴史・地理・言語などあらゆる事象を取り上げた遠州地方の郷土民俗誌。

3 一地方の民間で謡われたはやり歌。

4 静岡の方言で、「ご覧（らん）じろ」の変形。「見る」の尊敬語「ご覧になる」の活用で、「ご覧なさい」の意。

5 『浜松市史』(昭和 46 年(1971))では、「お江戸みたくば五社諏訪ごろじ 、お江戸まさりの五社や諏訪」と同様の俚謡（りよう）が紹介されており、書籍により、文言に多少の違いが見られる。

社 諏訪神社」として焼失前の五社神社の地に鎮座し、人々の信仰を集め続けている。現在も子守や子育ての神様としても信仰が厚く、初詣のみならず、七五三の時期にも多くの家族連れで賑わう。

現在の社殿は、昭和 57 年(1982)に竣工したものである。

イ.浜松秋葉神社

浜松秋葉神社の由緒によれば、永禄 13 年(1570)、徳川家康が修験者・叶坊浄全に命じ、北遠の霊山秋葉山(天竜区春野町)より勧請し、浜松城近くの丘陵の上に建立したのが中央区三組町にある秋葉神社のはじまりである。古くから、大名から町人に至るまで信仰を集め、現代においても、火防の信仰は厚く、古くから続く管粥祭や焼納祭などの祭礼も行われ、地域住民に広く親しまれている。

浜松秋葉神社には、「享保十五庚戌年(1730)」、松平豊後守藤原資訓の銘が刻まれた常夜灯など、浜松藩にかかわりのある大名が寄進した灯籠をはじめ多くの灯籠が奉納されている。江戸時代の大名寄進のものは、戦災の影響もあり、損壊が著しいものが多いが、参道沿いには「明和八年(1771)」の銘が刻まれた神明町が寄進した灯籠や、「文化九年(1812)」の銘が刻まれた成子坂中が寄進した灯籠が並び、さらには明治から昭和期の灯籠も多く、近年でも、寄付により灯籠の改修がされるなど、秋葉信仰の根強さが感じられる。また、現在の社殿は、社伝によれば、昭和 43 年(1968)に改築したものである。

図2-1-18 浜松秋葉神社

図2-1-19 浜松秋葉神社社殿と参道脇の灯籠

図2-1-20 浜松藩ゆかりの大名による秋葉山常夜灯
(右から 2 基が松平豊後守藤原資訓の寄進、損傷により、火袋部分が欠如している)

ウ.鴨江寺

奈良時代の創建と伝わる古刹。『鴨江寺縁起』(昭和 40 年(1965))によると、観音堂は慶長 13 年(1608)に火災により焼失したが、元和 2 年(1616)、徳川家康により再建された。その後、享保 3 年(1718)にも荒廃により建て替えられたが、空襲により再度焼失した。現在の観音堂(本堂)は、昭和 22 年(1947)に磐田市鎌田医王寺の薬師堂であったものを移築し

図2-1-21 鴨江寺観音堂(本堂)

たものであるという。『静岡県の近世社寺建築－近世社寺建築緊急調査報告書－』(昭和 54 年(1979)3 月 31 日)によると、桁行５間、梁間６間、木造、入母屋造銅瓦葺[1]の五間堂で、様式的に見て、18 世紀前半ごろの建築であったと推定されている。

観音堂は、昭和 62 年(1987)の大改修により、本堂手前に拝殿が建つ現在の姿となり、一般参詣者はこの拝殿で合掌する。

鴨江寺は、現在も鴨江観音の名で親しまれ、お鴨江まいり(鴨江寺彼岸会)など、市民の年中行事の場ともなっている。

図2-1-22 鴨江寺観音堂(拝殿)

④犀ヶ崖古戦場・犀ヶ崖(旧宗円堂境内)

犀ヶ崖古戦場は、元亀３年(1572)の三方ヶ原の戦いゆかりの場所で、徳川方の夜襲を受けた武田方の多数の兵士が谷(犀ヶ崖)に落ちて死傷したと伝わる地である。この徳川方の夜襲については、徳川方が崖に白い布の橋を張り、丈夫な橋が架かっているように見せかけて奇襲し、武田軍を谷底へ追い落とし大損害を与えたという伝説もあり、周辺には「布橋」の地名が残る。

犀ヶ崖は、現在でも深さ 10 メートルを超えるが、三方ヶ原の戦い当時の犀ヶ崖は深さが 40 メートルほどもある浸食谷で、長さ 450 メートルにわたって続いていたと言われている。

犀ヶ崖は、古跡や名所などを扱った、享和３年(1803)に成立した『遠江古蹟図絵』にも取り上げられており、江戸時代から知られていたことがわかる。遠江古蹟図絵には、犀ヶ崖の地に、「小寺一寺あり。青雲庵と云う。俗呼びて宗円と云う。」とあり、三方ヶ原の戦いによる死者の霊をまつった堂が存在していた(江戸時代は、青雲庵(青雲寺)と称された。宗円堂という呼称が定着したのは、昭和４～５年(1929～1930)ごろからといわれる。)。

現在は堂はなく、犀ヶ崖資料館が建ち、毎年７月 15 日には、この犀ヶ崖の地で、慰霊のための大念仏が行われている。

ア.史跡犀ヶ崖碑

かつて宗円堂があった場所には現在は堂はなく、犀ヶ崖資料館が建つ。犀ヶ崖古戦場や犀ヶ崖を含むこの資料館の敷地内には、「昭和 16 年(1941)」建立の銘のある「史蹟 犀ヶ崖」と彫られた碑が建っている。

現在、犀ヶ崖は、その一部が県指定史跡として保

図2-1-23 「史蹟犀ヶ崖」碑

[1] 移築当時は、古写真から茅葺屋根であったとみられるが、現在は改修されて銅瓦葺となっている。

存されるとともに、谷の西側は公園として整備され、犀ヶ崖資料館として公開されている。そして、この場所の歴史や遠州大念仏を後世に伝える場となっている。

イ.本多忠真の顕彰碑

犀ヶ崖資料館の敷地内には、「明治 24 年(1891)建碑」の銘のある、本多忠真の顕彰碑が建つ。本多忠真は、三方ヶ原の戦いで殿[1]を務めて戦死した人物である。また、周辺には、三方ヶ原の戦いにおいて家康の身代わりとなって戦死した夏目次郎左衛門の顕彰碑である「夏目次郎左衛門吉信旌忠碑」なども建ち、犀ヶ崖が三方ヶ原の戦いの代表的な場所であることを物語っている。

図2-1-24　本多忠真の顕彰碑

(4)城下町浜松で続く伝統的活動

①浜松まつり

浜松まつりは、神事を伴わない全国的にも珍しい大祭で、５月３日から５日の３日間にかけ、昼には勇ましい凧揚げ合戦、夜には絢爛豪華な御殿屋台の引き回しと賑やかな練りが行われている。浜松の“やらまいか”気質[2]も手伝ってか、浜松まつりは現在、170 を超える町が参加する、市内最大のまつりとなっている。

図2-1-25　浜松まつり(凧揚げ合戦)

浜松まつりの凧揚げは、400 年以上の歴史を持つとされ、３日には、各町が初子の誕生を祝い、健やかな成長を願って「初凧」を揚げ、４日と５日には、各町が互いの凧糸を絡ませ、擦り合いながら相手の糸を断ち切る、勇壮な大凧の「糸切り合戦」が行われる。一説には、450 年余り前、当時の浜松を治めていた引間城主(飯尾連龍)の長子義廣の誕生を祝って大凧を揚げたのが始まりとされるが定かではない。凧について記録に残っているものとしては、『高林家文書』[3]がある。このなかで、文化４年(1807)に初凧を揚げた記述が見られることから、このころには初節句と結びついた凧揚げの風習が始まっていたと推測できる。また、浜松まつりの凧の糸切り合戦は、明治期に浜松宿を中心に始まり[4]、凧揚げ場を、浜松宿から宿

1　軍が退くとき、最後尾にあって、追って来る敵を防ぐこと。

2　「やらまいか」とは、「やってみようじゃないか」という意味。“新しいことに積極果敢にチャレンジしてみよう”という、浜松周辺に特有の進取の気質。

3　浜松地方を代表する豪農高林家の江戸時代の日記で、昭和 29 年(1954)に浜松市立図書館へ寄贈されている。

4　明治期に浜松の職人町に消防組が組織され、各町の若者同士の対抗意識が高まって町同士による凧合戦が行われるようになったと考えられている。参加各町を「組」で表したり、古くから参加している利町の大正期の凧印に、その町の消防組の纏の頭部を図案化したものが見られる。

の外へ移しつつ、のちに、統一会場を設けて参加する町を増やしながら遠州地方に広がっていった。第二次世界大戦終戦後、昭和23年(1948)には、浜松市連合凧揚会主催で第1回の凧揚げ合戦が城下町浜松宿の24か町(伝馬・連尺・板屋町など)を中心に、50か町余の参加を得て盛大に開催され、昭和 25 年(1950)には、市民挙げてのおまつりにとの願いを込めて内容・組織も充実し、名称も「浜松まつり」となった。また、凧揚げ会場は何度も場所が変わったが、昭和42年(1967)以降は現在の会場でもある中田島会場(遠州灘海浜公園多目的広場)で行われている。戦前は、40から50か町の参加で開催されていた凧揚げ合戦は、昭和30年(1955)ごろには67を数え、近年では170を超える町が参加している。

浜松まつりの大凧は、２帖[1]から大きいもので 10 帖もの大きさになり、竹骨に貼られた和紙に主に赤・青・白などの色を使って「凧印」と言われる各町ごとの文字や図柄が描かれる。凧印は、町名に由来するものや町内の団結を強めるものが中心となっている。

また、初凧には、凧印に加え、左上に家紋、右下に子供の名前が入る。多くの初凧が悠々と大空を舞う姿は圧巻である。

浜松まつりの開幕は、5月3日の午前10時である。開会宣言と同時に上がる花火を合図に、参加町の大凧が空に向かって一斉に舞い上がる。と同時に、本部前では、各町の旗を掲げた町衆が集結し、「激練り[2]」と呼ぶ迫力たっぷりの激しい練りを繰り広げる。また、糸切り合戦では、「オイショ！オイショ！」や「ヤイショ！ヤイショ！」といった掛け声と共に、各町の誇りをかけて意地がぶつかり合う熱戦が繰り広げられる。

夜には、整列した町ごとの列が、凧揚げ合戦同様、「オイショ！オイショ！」や「ヤイショ！ヤイショ！」の掛け声と、喇叭と太鼓のリズムとともに、提灯を片手にすり足で練り歩く「練り」が行われる。夜、「初家[3]」で初子の誕生を祝って盛大に行うことを特に「初練り」といい、練りの最後は施主や子供を中心にして担ぎ、大きく繰り広げられる。その後、初家側は、初凧や初練りのお礼として、家の前で町内の参加者をお酒や料理でもてなす。また、特に中心市街地で行われる練りでは、隊列を崩し激しく押し合う「激練り」が度々行われ、盛り上がりを見せる。なお、練りのリズムを刻む喇叭で演奏される曲は、消防組でも使用されていた旧日本陸軍喇叭譜「駈歩行進」「速歩行進」が基になっていると言われ、浜松を代表する音色になっている。

---

1 1帖は約1.28平方メートル

2 「オイショ！オイショ！」や「ヤイショ！ヤイショ！」の掛け声と、喇叭と太鼓のリズムとともに、提灯を片手にすり足で練り歩く「練り」が、隊列を崩し、提灯を片手にもみくちゃになりながらリズムに乗って押し合う。

3 初子が生まれたお宅

また、夜には、市の中心部を舞台に、各町が集まって合同練りや御殿屋台[1]の合同引き回しも行われる。各町それぞれに趣向を凝らし、精巧な彫刻を施した屋台が、提灯の光を輝かせながらゆっくりと移動し、静岡銀行浜松営業部本館など、歴史のある建造物や中心市街地のまち並みを背景に、優雅で幻想的な美の競演を繰り広げる。屋台の上では、三味線とともに子供たちが太鼓や鼓（つづみ）、鉦（かね）、笛などでお囃子（はやし）を奏で、絢爛豪華な屋台引き回しに華を添える。

図2-1-26 浜松まつり(御殿屋台合同引き回し)

屋台の引き回しや練りは、市街地の合同引き回しエリアに限らず各町内においても行われ、浜松城跡やその復興天守閣、旧浜松銀行協会、旧浜松警察署などの歴史的な建造物の残る通りをはじめ、各町内でも、喇叭（らっぱ）の音や掛け声が聞こえるほか、屋台の引き回しなどを楽しむことができる。現在、浜松まつりで引き回す屋台を所有している町は 90 を超え、市街地での合同引き回しでは、３日間で延べ 70 を超える屋台が夜の街を幻想的に彩っている。浜松まつりのため、参加する各町内には、会所（かいしょ）と呼ぶ集会所が設けられ、また、屋台を持つ町は、屋台小屋と呼ぶ、御殿屋台を大切にしまっておく開口部の大きい蔵のような大きな屋台置き場を持つ。浜松まつりが近づくと、会所開きが行われ、大人も子供も会所に集まり、お囃子や喇叭の練習をしたり、まつり直前には、大凧の糸目付を行ったりする。まつりの際には会所や屋台小屋が人と屋台の起終点となり、まつり当日には、大凧を凧揚げ会場まで運搬する様子や、御殿屋台の引き回しや練りが町内を巡行する様子が見られる。

図2-1-27 御殿屋台と浜松城

[1] 現在のような御殿屋台は、昭和４年(1929)に初めてお目見えし、その後昭和 30 年代に盛んに造られたものだが、浜松まつりの屋台は、明治末期に凧揚げ合戦の運搬用に荷車(大八車)を使っていたことが起源と言われる。

図2-1-29　図2-1-28 の拡大範囲の拡大図

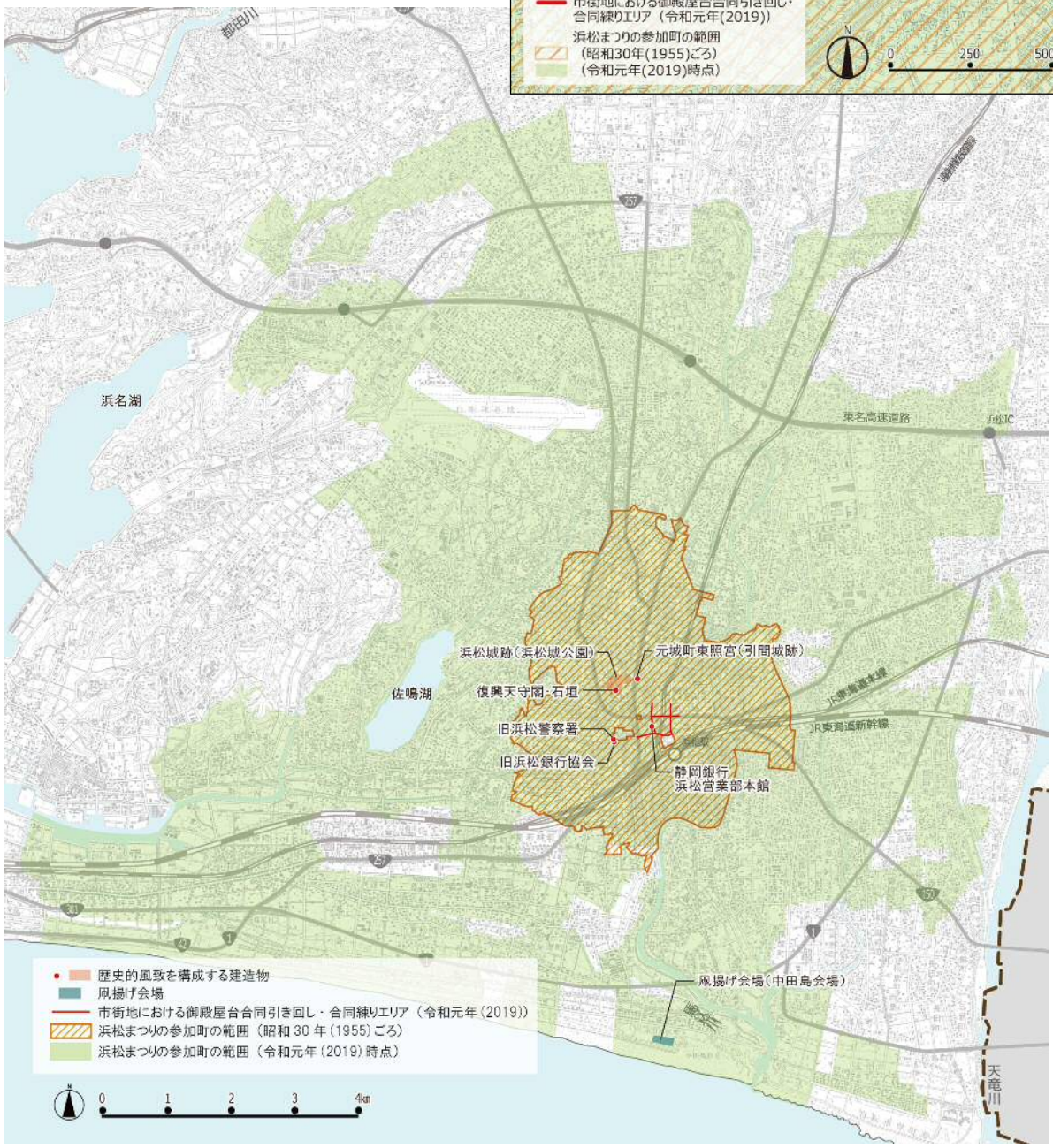

図2-1-28　凧揚げ会場及び浜松まつり御殿屋台合同引き回し・合同練り位置と浜松まつり参加町

■まとめ

老若男女が参加する浜松まつりは、端午の節句に初子（はつご）の誕生を祝い、町の誇りをかけて凧の糸切り合戦に挑み、御殿屋台や練りで市内を華やかにする、市内最大の催しとして、まつりへの参加の有無に関係なく、この時期、浜松の町をまつり一色に染めている。

昼間には凧揚げ会場で勇壮な凧揚げが行われ、夕方から夜にかけては、市の中心市街地と各町内で、古くから残る歴史ある建造物や、会所や屋台小屋と呼ばれる建物を備えたまちのなかを、町ごとに揃いの法被を着て、練りや御殿屋台の引き回しが行われる様は、まち並み景観と一体となって良好な歴史的風致を形成している。

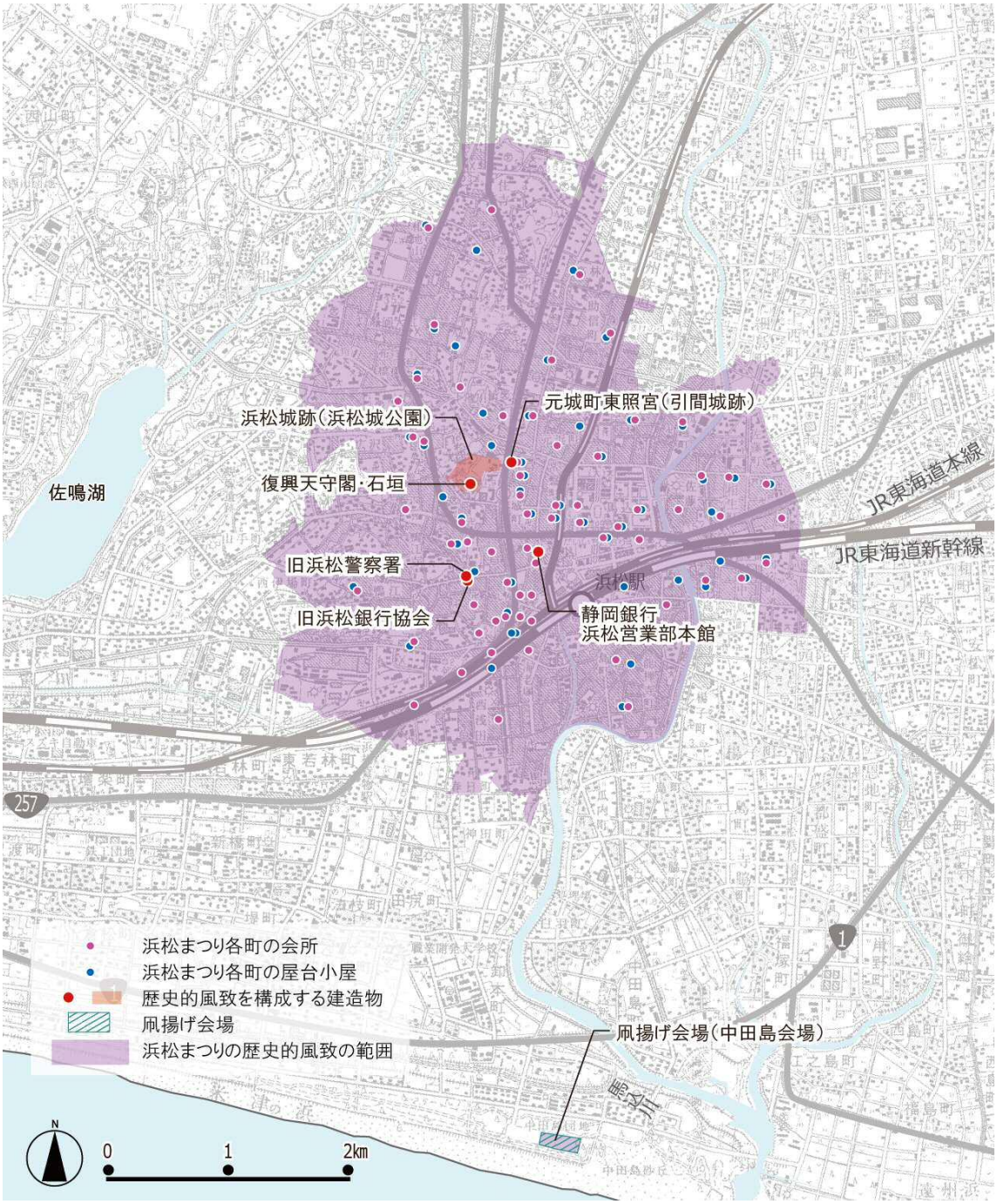

図2-1-30　浜松まつりの歴史的風致の範囲

②浜松城下町に残る年中行事

古くから引間と呼ばれた浜松には、昔から伝えられ、続けられている年中行事がたくさんある。なかでも、浜松城下町には、多くの神社仏閣があり、そのそれぞれで例祭や法要などが行われているが、七五三や彼岸会など、年中行事によっては、参拝する神社仏閣が市民に定着しているものもある。

ア.五社神社諏訪神社への七五三詣

五社神社諏訪神社は、戦前は別々の神社で、空襲で焼失する前の両神社の社殿は、その壮麗さから、「お江戸見たけりゃ浜松ごろじょ　お江戸ささりの五社や諏訪」などとうたわれ、遠くからの参拝者も多かったことが推定される。両神社が合祀された現在も、五社神社諏訪神社は普段から参拝者が多く、初詣ともなると、市内各地から人が集まり、大いに賑わう。正月三が日で約 10 万人の人が訪れるとも言われ、多くの参拝者で境内が埋め尽くされる。

図2-1-31　七五三詣(鳥居付近)

また、五社神社及び諏訪神社は、徳川２代将軍秀忠の産土神として崇敬されていたことにより、子守や子育ての神様としても信仰が厚く、古くから、お宮参りの参拝者も多かったという。昭和 41 年(1966)の市政映画「浜松歳時記」(浜松市広報課制作)のなかでも、七五三のお参りに来た多くの参拝者で境内が賑わう様子が記録されている。

図2-1-32　七五三詣(境内)

現在でも子守や子育ての信仰は厚く、11 月 15 日を中心に 10 月から 11 月の七五三の時期には、子供を連れた多くの家族連れが七五三詣に訪れ、社殿で祈禱を受けたり、神社の用意した千歳飴を買い求めたりするなど、多くの人で賑わっている。

イ.浜松秋葉神社の管粥祭と焼納祭

毎年１月 28 日には、浜松秋葉神社にて管粥祭と焼納祭が行われており、これらの行事は合わせて「秋葉まつり」や「秋葉さん」などとも呼ばれ、この日は参道や神社に至る道に露店が並び、親しまれている。

管粥祭は、江戸時代には行われていたと記録されており、通称「ごたく」とも呼ばれている。境内の参道中央にかまどを作り、大釜に湯を沸騰させ、五穀(米・麦・大豆・アワ・キビ)を投入し、中に管竹の束を入れてその中に入る五穀の様子により１年の農作物の豊凶を占う行事であり、かつては、農家の人たちが肥料の計画や予定を立てるよりどころとなっていた。春作・夏作・秋作の豊凶を占い、占いの結果は境内に貼り出される。現在では気象予報の技

術が進歩し、占いの要請はあまりなくなってしまったが、管粥祭当日の露店には、近年まで種屋や植木屋も出店していたといい、伝統ある行事として、現在でも毎年続けられている。

また、管粥祭と同日には、通称「おしめ納め」とも呼ばれている焼納祭が行われる。朝早くから夜遅くまで、多くの参拝者が家から正月飾りに使ったしめ飾りやお札、お守りなどを、火の安全を祈って焼納所（おふだおさめどころ）に納めていく。そして、夜に行われる焼納祭では、古いお札やお守りなどにつき給う御神霊の御昇天を願い、納められた家庭の一年の家内安全を祈願する。

図2-1-33　管粥祭

浜松秋葉神社の秋葉まつりは、『旅籠町平右衛門記録』に、貞享２年（1685）、「此まつり者、濱松町在々共ニおびたゞしく御座候、濱松町立始り而之まつりニ御座候」とあり、江戸時代から行われていたことが見て取れる。

図2-1-34　焼納祭

また、昭和 41 年（1966）の市政映画「浜松歳時記」（浜松市広報課制作）のなかでも、多くの人で賑わう様子が記録されており、現在でも、当日は、境内だけでなく高町から神社に至る道筋にも露店が並び、終日大勢の人で賑わう。

ウ.お鴨江まいり(鴨江寺彼岸会)

毎年、春と秋のお彼岸には、鴨江寺にて彼岸会が行われている。鴨江寺の彼岸会は、「お鴨江まいり」と言われ、「遠州のお彼岸と言えばお鴨江まいり」と言われるほどである。「死ねばお鴨江へ行く」と言われていたため、初彼岸詣りの際は、遠州浜松地域の家の人は必ず鴨江寺へ詣った。『鴨江寺縁起』（昭和 40 年（1965））にも、お彼岸のお鴨江まいりについて書かれており、昭和 40 年（1965）ごろには既に、お彼岸の時期にお鴨江まいりの人々で鴨江寺が賑わっていたことがわかる。お鴨江まいりの際には、今でも境内に多くの露店が並ぶが、かつては、鴨江寺への参道に沿って、ずっと東の方から露店が立ち並び、境内には見世物小屋なども開設され、一週間も続くほど賑わったという。

図2-1-35　お鴨江まいり(鴨江寺彼岸会)の境内

鴨江寺の本堂には、本尊である聖観音菩薩、善光寺如来[1]、聖徳太子が祀られており、お鴨

[1] 天正 11 年（1583）から 10 年余りに渡り、善光寺如来が祀られていたと伝わる。善光寺如来はその後、山城国（現在の京都）方広寺へ遷され、現在は同様の阿弥陀如来をお祀りしているが、鴨江寺では、今も、善光寺如来と呼称している。

江まいりの際には、拝殿[1]入り口のお札場も開き、お鴨江まいりの参拝客で埋まる。

また、中門手前の参道右手には、鋳造の大地蔵尊座像がまつられており、初詣やお鴨江まいりの際に参詣者が回向のため長柄の竹の柄杓で水をかけるところから、水向け地蔵と呼ばれている。

お鴨江まいりの際には、参詣者は、八角堂や水向け地蔵、本堂などをまわり、初仏のための初彼岸まいり、先祖供養・孝行まいりなどとして、心を込めて観音様やお地蔵様などにお参りする。

図2-1-36　水向け地蔵

■まとめ

浜松城下町には、多くの神社仏閣があり、そのそれぞれで例祭や法要などが行われているが、五社神社諏訪神社への七五三詣や、鴨江寺の彼岸会など、年中行事によっては、参拝する神社仏閣が市民に定着しているものや、浜松秋葉神社の管粥祭と焼納祭のように、その神社仏閣に特有の行事が行われるものもある。こうした年中行事は、行事の行われる神社仏閣の中だけにとどまらず、その参道にも縁日が出るなど、人々の楽しみにもなっており、歴史のある神社仏閣やその周辺に集い、そこで行われる伝統的な行事を大切にし、また、楽しむ様子は、これらが行われる建造物や周辺の市街地と一体となって守り伝えたい良好な歴史的風致を形成している。

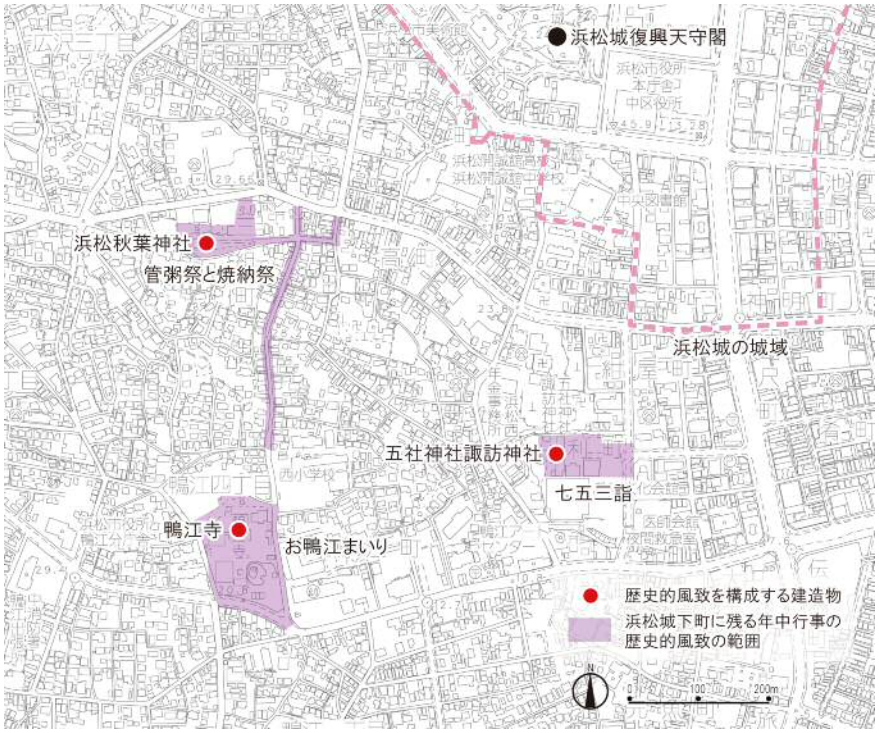

図2-1-37　浜松城下町に残る年中行事の位置と歴史的風致の範囲

[1] 本堂手前の参詣者が合掌する場。

③遠州大念仏

ア.遠州大念仏と遠州大念佛團(現　遠州大念仏保存会)の歴史

遠州大念仏は、犀ヶ崖(現犀ヶ崖資料館)や遠州各地で盆供養に行われている念仏踊である。

犀ヶ崖は、浜松城の北側約１キロメートルにある渓谷で、元亀３年(1572)12 月 22 日、三方ヶ原の戦いで武田信玄に大敗した徳川家康が命からがら浜松城に逃げ込んだ夜、武田信玄にどうにか一矢報いようと、犀ヶ崖近くに野営する武田軍を急襲し、これにより、地理に詳しくない武田軍は混乱し、崖に転落して多くの死者を出したという物語で知られる地である。

現在、この地には犀ヶ崖資料館が建つが、かつては、三方ヶ原の戦いによる死者の霊を祀ったお堂(時代により、青雲庵(青雲寺)や宗円堂などと称された。)が存在していた。

言い伝えでは、三方ヶ原の戦いの翌々年ごろより、夜更けに犀ヶ崖の谷底から人や馬のうめき声が聞こえたり、付近で怪我人が続出したり、イナゴの大群が発生して農作物に害を与えたりしたため、人々はこれを犀ヶ崖の戦死者のたたりと恐れるようになり、そこで家康が三河から了傳という僧侶を招いて七日七夜、鉦と太鼓を鳴らして供養したところ、たたりは鎮まったと云われている。以後、徳川家康は、念仏踊衆に三葉葵の紋付羽織を着ることを許し、念仏踊を奨励し、また、了傳の跡を継いだ宗円がさらに布教に努めたため、大念仏が遠州地方に盆供養の行事として広まり、遠州各地で盛んに行われるようになったと言われる。

大念仏のことについて書かれた記録には、宝暦２年(1752)ごろに成立したと考えられている、『旅籠町平右衛門記録』のなかに「濱松大念佛之由緒之覺」があり、大念仏の起こりや初盆の家をまわる風習が天正元年(1573)ごろから行われていることなどが記載されている。

その後、江戸時代には、町方の念仏が混雑のため自然と中止されたり、喧嘩によって死人や怪我人が多く出たため大念仏禁止令が出されていた記録も残る。

昭和５年(1930)、遠州各地で伝承されてきた遠州大念仏の各組[1]相互の融和や犀ヶ崖での大念仏による三方ヶ原の戦いの戦死者慰霊などのため、遠州大念佛團(現遠州大念仏保存会)が結成され、犀ヶ崖の宗円堂に本部が置かれた。大念仏は、江戸時代の最も盛んな時期には、約 280 の村々で行われていたと言われているが、大念佛團結成時に現存していた組は 40 組余りであった。その後、大念佛團の加入組数は増えたが、戦争により活動は一時休止。戦後、活動を再開し、一時期は 80 組余りにまで達したが、人員不足などの理由から活動を休止する組も増え、昭和 30 年代半ばには 70 組となった。その後も、加入・休止・再開により、加入組数は変動し、平成２年(1990)には 73 組までになったが、令和元年(2019)時点で遠州大念仏保存会に所属し活動している組は 53 組(浜松市内では 45 組)である。遠州大念仏の各組は、組の所属する各地区を主な活動場所として、盆供養のための念仏踊の活動を続けている。

[1] 遠州大念仏は、地区ごとに「組」を組織し、組単位で依頼のあった家の盆供養に回る。

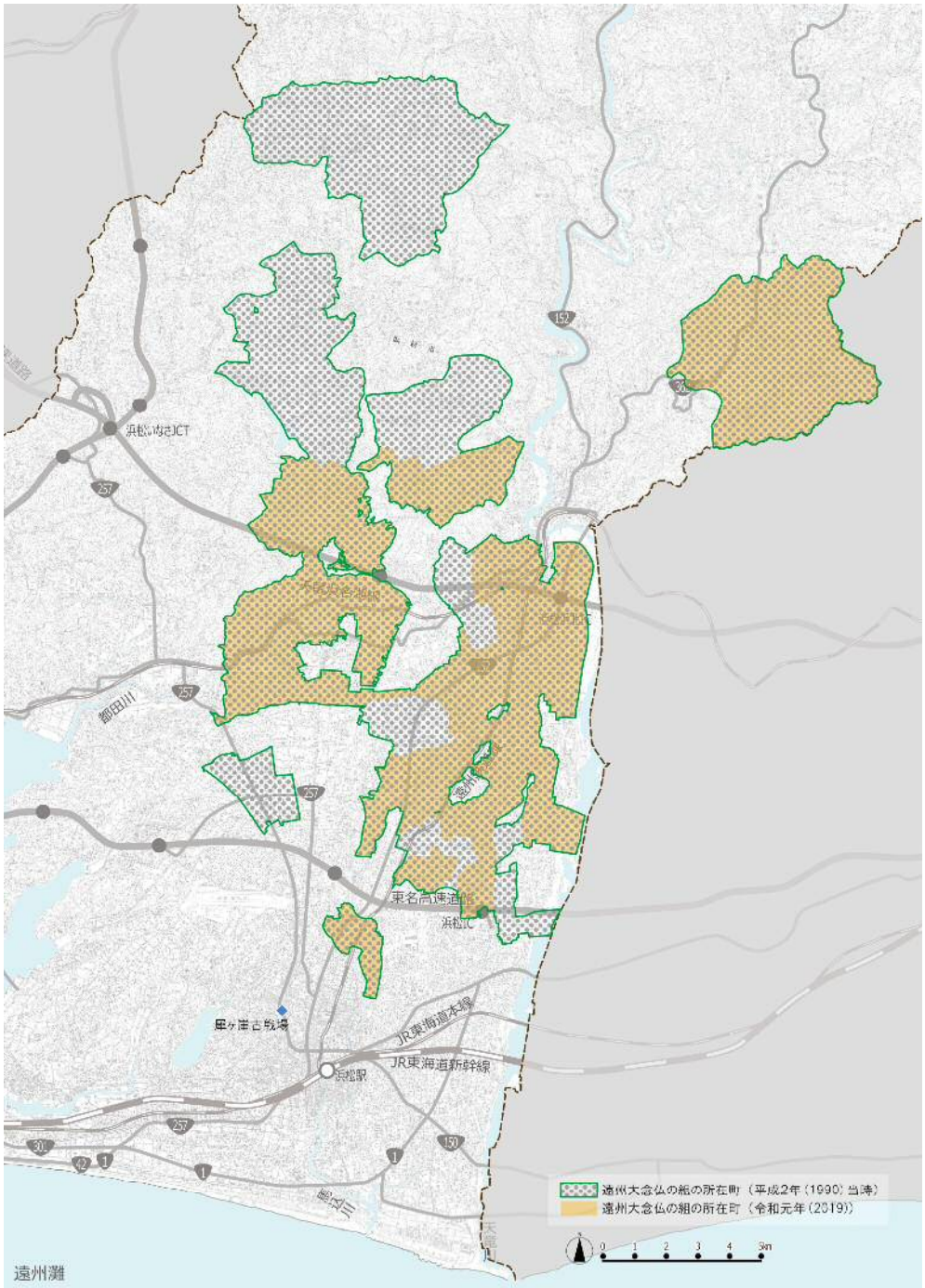

図2-1-38　遠州大念仏の組の所在町（遠州大念仏保存会資料による）

イ.遠州大念仏の概要

遠州大念仏（えんしゅうだいねんぶつ）は、地区で初盆を迎える家から依頼されると、その家を訪れて、庭先で奉納供養の大念仏を演じる。大念仏の一行は、必ず施主の家の手前で隊列を組み、施主の依頼を受けた引手（ひきて）と呼ばれる案内役に続いて施主の家に向かう。行列の先頭は三葉葵の羽織を着て衿章（えりしょう）をつけ、提灯を持った頭先（かしらさき）と呼ばれる統率責任者で、その後ろに、ひんどうろう

図2-1-39　遠州大念仏(道行)

を持つ頭、組の幟、双盤、笛、摺鉦[1]、太鼓、組名入りの提灯を持ち、回向の歌い手となる供回りと続き、最後に頭先と同様の恰好をした押しと続く、全体で 30 人を超す団体となり、笛・太鼓・鉦の音に合わせて行進する。

大念仏の一行は、初盆宅の庭先に入ると、太鼓を中心にして、その後方に双盤[2]を置き、音頭取りに合わせて念仏やうたまくら[3]を唱和する。そして、太鼓を勇ましく踊るように打ち鳴らし、初盆の家の供養を行う。

現在では、毎年 7 月 15 日に、史跡犀ヶ崖碑や本多忠真の顕彰碑のある、犀ヶ崖の傍に建つ犀ヶ崖資料館の敷地で、三方ヶ原の戦いの戦死者の慰霊のため、遠州大念仏保存会（旧遠州大念佛團）から 2 組が選ばれ、初盆宅の代わりに資料館へ祭壇を設置し、資料館前の広場を庭先に見立てて大念仏を行っている。

図2-1-40 遠州大念仏

■まとめ

遠州大念仏は、三方ヶ原の戦いの戦死者を慰霊することから始まったとされ、徳川家康によって奨励され、今では、遠州各地の広範囲でお盆の供養として広く行われている。

遠州大念仏の起こりについての言い伝えの場である犀ヶ崖でも、遠州大念仏保存会により、盆供養の遠州大念仏が復活し、史跡犀ヶ崖の碑などが残る犀ヶ崖そばの資料館の敷地で、毎年、保存会から選ばれた組が遠州大念仏を披露し、盆供養を行う様は、周辺環境と一体となって良好な歴史的風致を形成している。

---

1 「すりしょう」のほか、「すりがね」と呼称する組もある。

2 2 個を向かい合わせて一対に置き使う鉦。布を細かく切って束ねた撞木で打つと、それぞれの音が調和して独自の音を発する。

3 遠州大念仏で歌われる念仏の歌詞・台詞。

図2-1-41　遠州大念仏の道行ルートと歴史的風致の範囲

(5)まとめ

若き日の徳川家康が過ごした浜松市には、家康ゆかりの城跡や社寺が数多く存在し、また、現在の浜松市の中心部は、そうした神社仏閣の他、街区の構成や町名などに城下の名残を色濃く留めている。また、明治期以降も、人々の生活が引き続きこの地で営まれたことで、家康の浜松城在城時からの信仰と行事は、今なお続いているものもあり、江戸時代から続く伝統的な行事は、時代とともに形を変えながらも、人々の生活のなかに溶け込んで、受け継がれている。

焼納祭や彼岸会、遠州大念仏のように、宗教行事と深く結びついている伝統行事もあれば、浜松まつりのように、多くの人々が熱中し、生活の張りとなっている行事もある。

これらは、そこに住まう人々の気質や信仰とも結びつく文化とも言え、そうした営みは浜松秋葉神社や鴨江寺といった神社仏閣や、犀ヶ崖といった史跡を舞台に、若しくは、浜松城跡や静岡銀行浜松営業部本館などの歴史のある建造物や、会所や屋台小屋といった営みに関係する建造物のあるまち並みを背景に行われ、城下町であった町の景観と一体となって良好な環境を形成しており、守り伝えていきたい歴史的風致である。

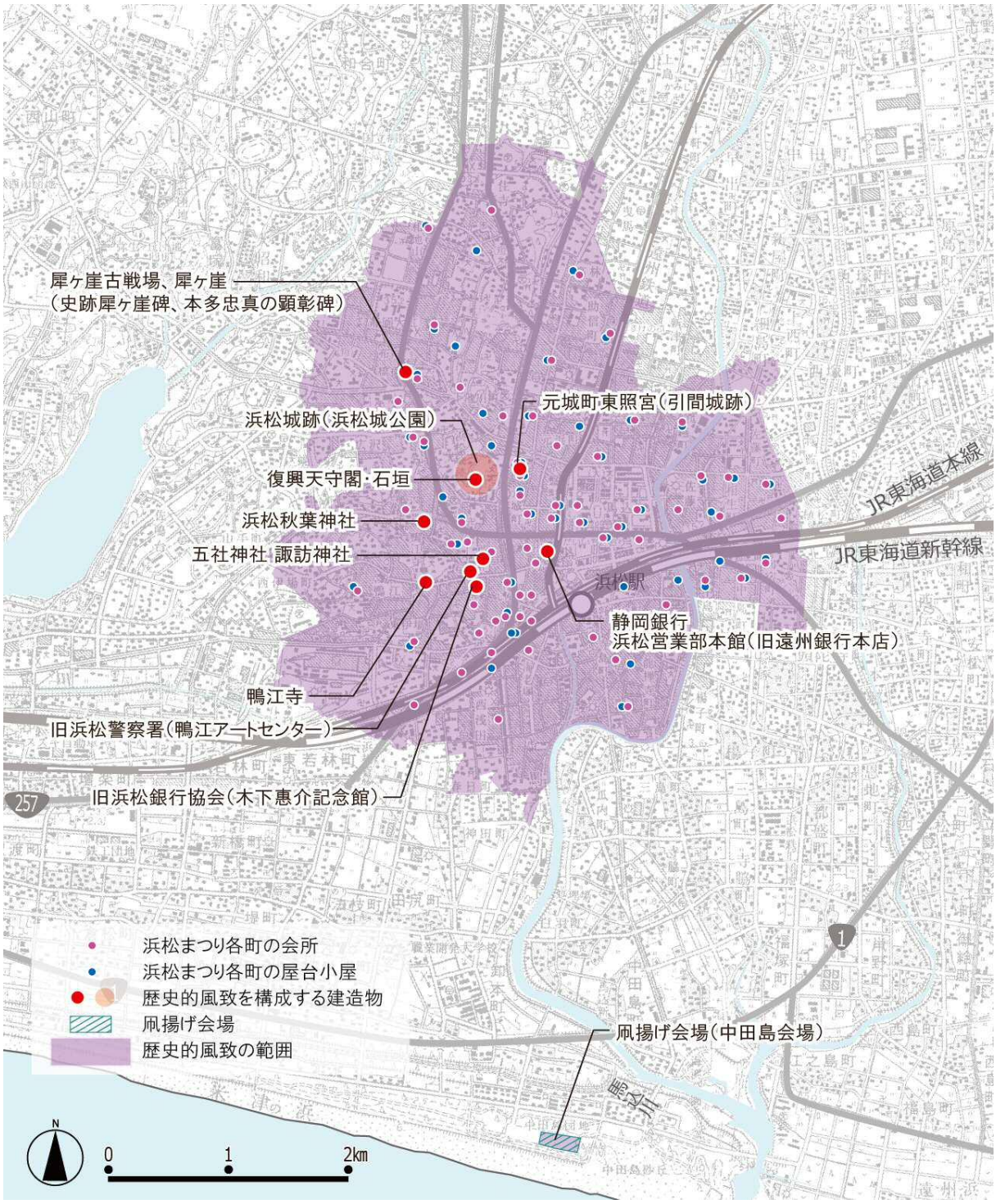

図2-1-42　浜松城下の営みにみる歴史的風致の範囲

ちょっといっぷく
コラム

楽器と音楽のまち　浜松

浜松は、スズキ、ヤマハ、カワイ、ローランド、浜松ホトニクスなど、グローバルに活躍する世界的な企業が拠点を構えるとともに、現代社会の発展に欠かせない、高度なものづくり基盤技術や開発技術を有する企業が軒を連ねる、国内トップクラスの産業集積都市である。

なかでも、楽器産業は有名で、ヤマハやカワイといった世界トップクラスの楽器メーカーの発祥の地でもあり、大手楽器メーカーから中小の専業メーカー、個人で営む職人工房まで、楽器関連企業が 200 社以上も集まっている。

浜松の楽器産業は、初等音楽教育の広まりや日本の音楽史の進展とともに発展を遂げ、現代では学校・教育用楽器や管楽器、電子楽器など、幅広い楽器が生産されるにいたっている。また、平成 17 年(2005)には電子楽器のローランドが浜松に本社を移転したことで、浜松は国内大手楽器メーカーが本社を置く、「楽器づくりのまち」としてさらに発展を遂げた。

また、浜松市は、楽器製造だけでなく、平成３年(1991)には「浜松国際ピアノコンクール」を開催、平成 26 年(2014)には、アジア初となる「ユネスコ創造都市ネットワーク・音楽分野」への加盟が認められるなど、学校教育だけでなく、街中でも音楽があふれ、音楽イベントも豊富な、「音楽の街」・「音楽の都」としても発展を続けている。

ＪＲ浜松駅前の広場「キタラ」などの街中の広場では、プロムナードコンサートが行われたり、街中でハママツ・ジャズ・ウィークややらまいかミュージックフェスティバルなどの音楽祭が行われたりするなど、長年、生活の随所で楽器や音楽に触れる機会があふれている。

図2-1-43　駅前広場「キタラ」でのプロムナードコンサート

ちょっといっぷく
コラム

浜松注染(ちゅうせん)そめ＜県指定郷土工芸品＞

遠州地方は、江戸時代からすでに泉州(せんしゅう)(大阪府南部)や三河(みかわ)(愛知県東部)などとともに、日本有数の綿業地として全国に知られていた。明治期には、力織機(りきしょっき)の発明により生産が大きく伸び、第一次世界大戦後には、染色加工技術の導入により、染色業も発展した。

浜松注染そめは、浜松ゆかたを支える伝統技法で県の郷土工芸品に指定されている。注染そめの名は、ゆかたなどの生地を染めるのに、細口やかんで染料を注ぐ様子から名づけられている。浜松注染そめは、絶妙な注ぎ技術による独特のぼかしやにじみが特徴で、この技法で染められた生地は、裏表同じように染まるだけでなく、色あせもしにくく、やわらかく仕上がる。

浜松注染そめの始まりは、明治 20 年代の手拭染めにルーツを見ることができるが、その技術を活かし、大正初期に注染に代表される浜松ゆかたの生産が始まり、遠州のからっ風と天竜川の豊かな水、そして職人の技術により、浜松注染そめの技法と、注染技法によるゆかた・手拭い・のれんなどが普及した。

浜松では、特に、ゆかたのほか、浜松まつりの手拭いにも利用され、注染そめによる製品は、市民の生活のなかに溶け込んでいる。

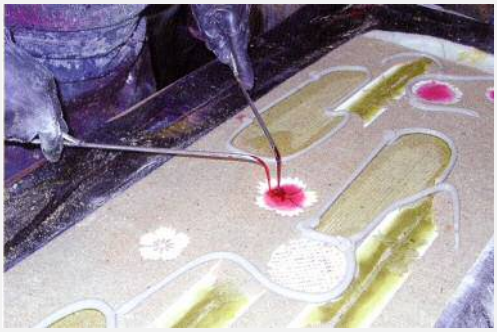

図2-1-44 注染そめの作業の様子

図2-1-45 注染そめ

ちょっといっぷく
コラム

家康の散歩道

浜松城から徳川家康ゆかりの地を歩いて巡るルートが、「家康の散歩道」として設定されている。ルートは、三方ヶ原の戦いや築山御前ゆかりの地(犀ヶ崖古戦場、家康ゆかりの三カ寺(普済寺・西来院・宗源院)、太刀洗の池など)を巡る「合戦ルート」と、浜松城とその城下町(元城町東照宮、五社神社諏訪神社、浜松八幡宮、松尾神社など)を巡る「城内・城下ルート」が設定され、地形や名所・旧跡を訪ねることができる。

太刀洗の池

太刀洗の池は、徳川家康の正室・築山御前を、家康の家臣が殺害した太刀を洗ったと伝承する池である。そのときの刀の血を洗ったのが太刀洗の池で、築山御前が亡くなった場所が御前谷と言われており、今でも付近に御前谷の地名が残っている。

浜松まつりに参加している佐鳴台の組は、凧印に女性の喜怒哀楽を表現するという般若の面を使用しているが、これは地区内に築山御前にまつわる太刀洗の池が存在していたことがその理由の一つとされ、毎年、浜松まつりの際には、近くに太刀洗の池があったと伝わる「史蹟太刀洗池」の石碑の建つ広場の一角でお参りをしている。

西来院

謀反の疑いから佐鳴湖畔で38歳の生涯を閉じることとなった家康の正室・築山御前の遺体は西来院に葬られ、墓所として霊廟(月窟廟)がおかれている。

築山御前は、信康の助命嘆願のため岡崎から浜松城の家康のもとへ向かい、現在の御前谷付近で殺害されたが、このときの経路は、姫街道(本坂通)を経由し、浜名湖畔から舟で佐鳴湖に入り、小藪河岸付近で上陸して浜松城へ向かうところだったとされている。

図2-1-46 家康の散歩道(合戦ルート)

図2-1-47 家康の散歩道(城内・城下ルート)